

# 社会反乱

生田地名会議

現在の学園斗争は、学園という我々の社会的な場から出発しつつも、單に「学生自治に対する規制規制」といった形を突破し、政治的開拓として存在している。即ち全田学園斗争が今や個別大学における手直し的取扱を不可能ならしめ、70年への予防強度を含めた全田開拓綱と本学の再編成の拘束的暴力的加速的進行を目指した「大学立法」の設立に民主主義さを無視した強行裁決での登場により、より明確となった。

20年の大曾根学園事以降開拓した「口大協自主規制路線」は、如詔や研究運営の松らとその社会的地位、經濟的保障を現世的の利益として持つ教授達は、その物質的基盤としての学内管理秩序と教授集団の内部結束を「大学の自治・研究の自由」と美化して障壁としていた。從って60年安保に批判した支配階級がその帝國主義国家としての口内体制の全面再編の一環として大學に、目的意識のな政争ははじめた時、教授達は彼らの現世的利害排他的方針を犯されない範囲で——と言うよりそれを守る形で——权力に抵抗したが、彼らの取り引き抵抗は「大学の自治・研究の自由」の名において対抗的自律性を守るべく权力に屈服し、擴張して学生を強圧し、自主要的に大学管理支配を守ってきたのである。これが実体としての「大学の自治」=教養会の「自治・自主規制路線」である。それは一般的な序維持に止まらず、当時の主觀的意図はともあれ「大学の帝國主義的再編を自ら担う」とされ、「対する学生の叛逆を抑圧する」という歴史的意味での「自主規制」であった。

だが、その「自主規制」そのものが、教授達の主觀にとっては、50年代の权力支配が、未だ大学の意識的な体制内核化への方針を確立していかなかった時にあり得た幻想的「大学の自治」の理念を保守する形で意識されたが故に過渡的なものであった。従って遅かれ早かれ決壊する運命であった。故に60年を勝利的ト運んだ支配权力が、50年代後半から60年代前半まで展開された、日本帝國主

## 社会深部での斗争を地区共斗会議の創出に以て克ち取れ!!

### 4.15 農学部討論集会

元農学生会委員長 林尾氏  
日大農歎医助教 水林氏  
明大助手共斗会議等の出席  
全ての学友は、集会に参加せよ!!

成長において重化学工業中心の产业结构を確立しつつも60年代前半に高度成長にゆきづなった日本帝国主義は、65年日韓条約を突破口に、東南アジア再侵略に向けて、国外的には安保に付される日米反革命軍事同盟、そして日本帝の政治的人格モードを確立するものとしてASIANを中心に東南アジア侵略軍事会議、アジア開発銀行が存在する。そして国内的には日本帝の東南アジア進出が「このようないくつかの軍事的体制を背景に進められるのであるが、激化する列強間の市場分割戦に端を発くべく、口内体制の脆弱性を克服する全面的再編成が追及されてゐるが故に、そのイデオロギーの生産場所であり、かつ又、人柄等の力商品の生産場所である大学へのより陽気な開拓として形がされていったならば、加藤・東大近代化路線に日共リズムが包括され、として切り開かれていた。その開拓が、そういふ、日本帝主義の再編程において、諸事実が開拓として形がされていったならば、加藤・東大近代化路線に日共リズムが包括され、として切り開かれていた。その開拓が、

争はいた時、教授達は彼らの現世的利害を犯されない範囲で——と言うよりそれを守る形で——权力に抵抗したが、彼らの取り引き抵抗は「大学の自治・研究の自由」の名において対抗的自律性を守るべく权力に屈服し、擴張して学生を強圧し、自主要的に大学管理支配を守ってきたのである。

但引明大においても、生田の地において試験研究争を貫徹し、市民社会深部からの反乱としてこの学園斗争を開拓していくのである。すべての学友諸君、帝國主義者連携反革命の風に抗せむ社会燃反乱に進撃せよ。